

5. もも（ネクタリンを除く）

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	I C ボルドー 4 1 2	散布	-	-	
41+25	アグリマイシン-1 0 0	散布	収穫 60 日前まで	2 回以内	
25	(ストレプトマイシン) アグレプト水和剤	散布	収穫 60 日前まで	2 回以内	
	アグレプト液剤	散布	収穫 60 日前まで	2 回以内	
3	アンビルフロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	
M2	(水和硫黄) イオウフロアブル	散布	発病前～発病初期 ^{注4)}	-	
	コロナフロアブル	散布	-	-	
	サルファーゾル	散布	発病前～発病初期	-	
3	インダーフロアブル	散布	収穫前日まで	4 回以内	
3	オーシャイン水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
M1*+M4	オキシラン水和剤	散布	発芽前	4 回以内	
3	オンリーワンフロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	
7	カナメフロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	
M1*	キノンドー水和剤 4 0	散布	発芽前～開花直前まで (但し、収穫 60 日前まで)	5 回以内	
M1	クプロシールド	散布	-	-	
3	サンリット水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
3	スコア顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
11	ストロビードライフロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	
2	スミレックス水和剤	散布	収穫 3 日前まで	3 回以内	
M7+17	ダイマジン	散布	収穫前日まで	2 回以内	
M5	ダコニール 1 0 0 0	散布	収穫前日まで	6 回以内	
M5+1	ダコレート水和剤	散布	収穫 3 日前まで	3 回以内	
2+M5	ダコレックス水和剤	散布	収穫 3 日前まで	3 回以内	
M3	(チウラム) チオノックフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	5 回以内	
	トレノックスフロアブル				
M9	デランフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	4 回以内	
1	トップジンM水和剤	散布	収穫前日まで	6 回以内	
3	トリフミン水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
11+7	ナリアWDG	散布	収穫前日まで	2 回以内	
U18	バリダシン液剤 5	散布	収穫 7 日前まで	4 回以内	
7	パレード 1 5 フロアブル	散布	収穫前日まで	2 回以内	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
11	フrintフロアブル 2 5	散布	収穫前日まで	3 回以内	
7	フルーツセイバー	散布	収穫前日まで	3 回以内	
M7	(イミノクタジナルベシル酸塩) ベルコート水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
	ベルコートフロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	
1	ベンレート水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
41	マイコシールド	散布	収穫 21 日前まで	5 回以内	
3	ラリー水和剤	散布	収穫前日まで	4 回以内	
2	(イプロジオン) ロブラール水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
	ロブラール 5 0 0 アクア	散布	収穫前日まで	3 回以内	
M2	石灰硫黄合剤	散布	発芽前	-	
M1	硫酸銅	ボルト®-液を調製して均一に 散布する	-	-	

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	(アクリナトリン) アーデント水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
	アーデントフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
3	アグロスリン水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
3	(ペルメトリン) アディオオン水和剤	散布	収穫7日前まで	6回以内	
	アディオオンフロアブル	散布	収穫前日まで	6回以内	
4	(イミダクロプリド) アドマイヤー水和剤	散布	収穫3日前まで (但し、露地栽培につ いては発芽期から開 花期を除く)	2回以内	
	アドマイヤー顆粒水和剤	散布	収穫3日前まで (但し、露地栽培につ いては発芽期から開 花期を除く)	2回以内	
16	アブロードフロアブル	散布	収穫14日前まで	3回以内	
4	(ジノテフラン) アルバリン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
	スタークル顆粒水溶剤				
29	ウララDF	散布	収穫14日前まで	2回以内	
28	エクシレルSE	散布	収穫前日まで	3回以内	
12	オマイト水和剤	散布	収穫21日前まで	2回以内	
15	カスケード乳剤	散布	収穫14日前まで	2回以内	
1	ガットキラー乳剤	樹幹部及び主枝に散布	休眠期(落葉後～萌芽 前)	1回	
20	カネマイトフロアブル	散布	収穫7日前まで	1回	
13	コテツフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
9	コルト顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
6	コロマイト乳剤	散布	収穫7日前まで	1回	
-	コンフューザーMM	デイスパンスーを対象作物の枝 に挟み込み、または巻き付 け設置する。	成虫発生初期～終期	-	果樹類
1	サイアノックス水和剤	散布	収穫21日前まで	3回以内	
3	サイハロン水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
28	サムコルフロアブル10	散布	収穫前日まで	2回以内	
21	サンマイト水和剤	散布	収穫3日前まで	1回	
3	スカウトフロアブル	散布	収穫前日まで	5回以内	
-	スカシバコンL	デイスパンスーを対象作物の枝 に巻き付け設置する。	成虫発生初期～終期	-	果樹類
5	スピノエースフロアブル	散布	収穫3日前まで	3回以内	
1	スプラサイド水和剤	散布	収穫21日前まで	2回以内	
1	(MEP) スミチオン水和剤40	散布	収穫3日前まで	6回以内	
	スミチオン乳剤	散布	収穫3日前まで	6回以内	
1	ダーズバンDF	散布	収穫14日前まで	5回以内	
1	ダイアジノン水和剤34	散布	収穫前日まで	4回以内	
23	ダニゲッターフロアブル	散布	収穫前日まで	1回	
25	ダニサラバフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
21	ダニトロンフロアブル	散布	収穫7日前まで	1回	
4	ダントツ水溶剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
5	(スピネトラム) ディアナWDG	散布	収穫前日まで	2回以内	
	デリゲートWDG				
15	デミリン水和剤	散布	収穫7日前まで	3回以内	
3	テルスター水和剤	散布	収穫14日前まで	2回以内	

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
1	トラサイドA乳剤	樹幹及び主枝に十分散布する。	収穫後～発芽前（幼虫食入期）	1回	
3	トレボン水和剤	散布	収穫14日前まで	3回以内	
15	ノーモルト乳剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	ハーベストオイル	散布	発芽前	-	
3+1	パーマチオン水和剤	散布	収穫7日前まで	6回以内	
21	ハチハチフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
4	バリアード顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
10	バロックフロアブル	散布	収穫7日前まで	2回以内	
21	ピラニカ水和剤	散布	収穫14日前まで	1回	
28	(フルベンジアミド) フェニックスフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
	フェニックスフロアブル	樹幹部及び主枝に散布	開花期まで	1回	
	フェニックス顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
4	ベストガード水溶剤	散布	収穫14日前まで	3回以内	
20	マイトコーネフロアブル	散布	収穫前日まで	1回	
3	(フルバリネート) マブリック水和剤20	散布	収穫21日前まで	2回以内	
	マブリックEW	散布	収穫21日前まで	2回以内	
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
1	ラビキラー乳剤	樹幹及び主枝に十分散布する。	落葉後～発芽前（休眠期）	1回	
3	ロディー水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

注4) 登録会社により使用時期が異なるので、登録内容を確認して使用する。

品種や気象条件により収穫時期が異なるので、薬剤の使用時期（収穫前日数）に注意する。
 農薬の使用回数は、前年の収穫後から本年の収穫までの期間の使用回数であるので注意する。

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項										
休眠期 (落葉から 発芽前まで)		胴 枯 病	1. 胴枯病の発生園では被害枝を切り取り、又は患部を削り取って切り口に塗布剤を塗布する。										
発芽前	<p>水 (86 ℓ)</p> <p>石灰硫黄合剤 14 ℓ</p> <p>又は</p> <p>殺菌剤</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>オキシラン水和剤</td> <td>200 g</td> </tr> <tr> <td>キノドー水和剤40</td> <td>200 g</td> </tr> <tr> <td>チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス)</td> <td>200 ml</td> </tr> </table> <p>のいずれか</p> <table border="1" style="margin-left: 20px; width: 150px;"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>300ℓ</td> </tr> </table>	オキシラン水和剤	200 g	キノドー水和剤40	200 g	チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス)	200 ml	10a 当り 散布量	300ℓ	<p>越冬病害虫 主として</p> <p>縮葉病</p> <p>黒星病</p> <p>せん孔細菌病</p> <p>胴枯病</p> <p>ハマキムシ類</p> <p>コスカシバ</p> <p>クイムシ類</p>	<p>1. ハマキムシ類の幼虫による被害が多い場合は、4月上旬頃にダズバンDF3,000倍液を散布する。</p> <p>2. コスカシバの防除を前年の収穫後（秋期）に実施していない園では、被害部の樹脂を取り除き、発芽直前にガットキラー乳剤100倍液、ラビキラー乳剤200倍液のいずれかを寄生部位の枝幹に散布する。または、開花期までにフェニックスフロアブル500倍液を地際部から地上1m位までの樹幹及び主枝に散布する。なお、いずれも使用回数は1回のため注意する。</p> <p>3. モモアカアブラムシの越冬卵ふ化後の防除にはハーベストオイル50倍液を発芽直前に散布する。</p> <p>4. フェニックスは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。</p>		
オキシラン水和剤	200 g												
キノドー水和剤40	200 g												
チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス)	200 ml												
10a 当り 散布量	300ℓ												
開花始め	<p>【せん孔細菌病防除対策】</p> <p>4-12式ボルドー液</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>硫酸銅</td> <td>400 g</td> </tr> <tr> <td>生石灰</td> <td>1,200 g</td> </tr> </table> <p>又は</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>水</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ICボルドー412</td> <td>3.3 kg</td> </tr> </table> <table border="1" style="margin-left: 20px; width: 150px;"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>300～350ℓ</td> </tr> </table>	硫酸銅	400 g	生石灰	1,200 g	水		ICボルドー412	3.3 kg	10a 当り 散布量	300～350ℓ	せん孔細菌病 コスカシバ	<p>1. せん孔細菌病の発生園では必ず散布する。</p> <p>2. コスカシバの交信かく乱剤スカシバコンLは4月下旬が設置適期である（別表-4参照）。</p>
硫酸銅	400 g												
生石灰	1,200 g												
水													
ICボルドー412	3.3 kg												
10a 当り 散布量	300～350ℓ												
<p>【せん孔細菌病防除対策】 伝染源となる春型枝病斑が目立ってくるので、この時期から6月まで園内を点検して剪除する。</p>													
<p>コンフェューザーMM（120本/10a）は、この時期から5月中下旬までに取り付ける（別表-4参照） 対象害虫：モモシンクイガ、ナシヒメシンクイ、リンゴコカクモンハマキ、モモハモグリガ</p>													

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項								
落花後	<p>せん孔細菌病防除剤</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="padding: 2px;">アグレプト水和剤</td> <td style="padding: 2px;">100 g</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">アグレプト液剤</td> <td style="padding: 2px;">100 ml</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">アグリマイシン-100</td> <td style="padding: 2px;">66 g</td> </tr> </table> <p>のいずれか</p> <p>殺 虫 剤 (別表-3による)</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto; width: 200px;"> <tr> <td style="padding: 2px;">10a 当り 散布量</td> <td style="padding: 2px; text-align: center;">300~350ℓ</td> </tr> </table>	アグレプト水和剤	100 g	アグレプト液剤	100 ml	アグリマイシン-100	66 g	10a 当り 散布量	300~350ℓ	<p>せん孔細菌病 うどんこ病 アブラムシ類 モモハモグリガ ハマキムシ類 リンゴハダニ</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. アグレプト液剤・水和剤、アグリマイシン-100 は、ストレプトマイシン耐性菌出現のおそれがあるので注意する。なお、早生種では、使用時期に注意する。 2. アグレプト液剤・水和剤、アグリマイシン-100 はぶどうにかかると種なし果を生じるので、かからないように注意する。 3. うどんこ病の多発園ではコロナフロアブル 500 倍液、パレード 15 フロアブル 2,000 倍液、カナメフロアブル 4,000 倍液のいずれかを散布する。 4. アブラムシ類の発生が多く、マメコバチ等訪花昆虫の活動期間中の防除が必要な場合はウララ D F 4,000 倍液を散布する。 5. モモハモグリガ越冬世代成虫の誘殺数が多く、マメコバチ等訪花昆虫の活動期間中の防除が必要な場合は、フェニックス顆粒水和剤 4,000 倍液、サムコルフロアブル 10 の 5,000 倍液、I G R 剤のいずれかを散布する。 6. リンゴハダニの発生が多い場合は殺ダニ剤を使用する。 7. I G R 剤、サムコル、フェニックスは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
アグレプト水和剤	100 g										
アグレプト液剤	100 ml										
アグリマイシン-100	66 g										
10a 当り 散布量	300~350ℓ										

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項								
落花 10 日後 (5 月中旬)	<p>殺菌剤 チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス) 200 ml</p> <p>せん孔細菌病防除剤 <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="padding: 2px;">アグレプト水和剤</td> <td style="padding: 2px;">100 g</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">アグレプト液剤</td> <td style="padding: 2px;">100 ml</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">アグリマイシン-100</td> <td style="padding: 2px;">66 g</td> </tr> </table> のいずれか</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td style="padding: 2px;">10a 当り 散布量</td> <td style="padding: 2px;">350~400ℓ</td> </tr> </table>	アグレプト水和剤	100 g	アグレプト液剤	100 ml	アグリマイシン-100	66 g	10a 当り 散布量	350~400ℓ	<p>せん孔細菌病 うどんこ病 黒星病 カメムシ類 ウメシロカイガラムシ アブラムシ類 モモチョッキリ</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 5 月中下旬は黒星病の感染最盛期にあるので降雨前散布を心がける。 2. チウラムにかえて水和硫黄剤（イオウ、コロナ、サルファーズル）の 500 倍液を散布してもよい。 3. 水和硫黄剤は高温時に散布すると薬害の発生するおそれがある。 4. アグレプト液剤・水和剤、アグリマイシン-100 は、ストレプトマイシン耐性菌出現のおそれがあるので注意する。なお、早生種では、使用時期に注意する。 5. アグレプト液剤・水和剤、アグリマイシン-100 はぶどうにかかると種なし果を生じるので、かからないように注意する。 6. うどんこ病の発生園では、チウラムにかえてストロビードライフロアブルまたはナリア W D G の 2,000 倍液を散布する。 7. カメムシ類の発生が多い場合は、この時期以降、スミチオン水和剤 40 の 1,000 倍液を散布する。 8. ウメシロカイガラムシの寄生が多い場合は、第 1 世代のふ化幼虫出現初期にあたるこの時期に、アプロードフロアブル 1,000 倍液を散布する。 9. モモチョッキリの発生が多い場合は、モスピラン顆粒水溶剤 4,000 倍液を散布する。 10. モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
アグレプト水和剤	100 g										
アグレプト液剤	100 ml										
アグリマイシン-100	66 g										
10a 当り 散布量	350~400ℓ										

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項		
5 月 下 旬	殺菌剤 チウラムフロアブル （チオノック、トレノックス） 200 ml <table border="1" data-bbox="379 582 772 676"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>350～400ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	350～400ℓ	せん孔細菌病 うどんこ病 黒星病 カメムシ類 ウメシロカイガラムシ アブラムシ類 モモチョッキリ	<ol style="list-style-type: none"> チウラムにかえて水和硫黄剤（イオウ、コロナ、サルファーズル）の 500 倍液を散布してもよい。 水和硫黄剤は高温時に散布すると薬害の発生するおそれがある。 せん孔細菌病の多発園では、バリダシン液剤 5 の 500 倍液、デランフロアブル 600 倍液、クプロシールド 1,000 倍液（炭酸カルシウム水和剤 100 倍加用）のいずれかを散布する。 デランはアプローチ B I、ニーズを加用すると薬害を生じるので加用しない。 クプロシールドは開花期以降に散布すると薬害が発生するおそれがあるので、炭酸カルシウム水和剤を必ず加用する。また、弱樹勢樹では基部葉が赤変、落葉する場合がありますため注意する。 うどんこ病の多発園ではチウラムにかえてコロナフロアブル 500 倍液、パレード 15 フロアブル 2,000 倍液、カナメフロアブル 4,000 倍液のいずれかを散布する。
10a 当り 散布量	350～400ℓ				
6 月 上 旬	殺菌剤 チウラムフロアブル （チオノック、トレノックス） 200 ml 殺虫剤 （別表－3による） <table border="1" data-bbox="379 1648 772 1742"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450～500ℓ	せん孔細菌病 黒星病 ホモプシス腐敗病 モモハモグリガ クワコナカイガラムシ カメムシ類	<ol style="list-style-type: none"> せん孔細菌病の多発園では、この時期から 7 月上旬までバリダシン液剤 5 の 500 倍液、デランフロアブル 600 倍液、マイコシールド 1,500 倍液のいずれかを散布する。マイコシールドは薬剤耐性菌出現のおそれがあるので注意する。 ホモプシス腐敗病の多発が予想される場合は、この時期以降ダコレックス水和剤 800 倍液、トップジン M 水和剤、ダコレート水和剤の 1,000 倍液、ダイマジン 1,500 倍液、ベルコート水和剤・フロアブルの 2,000 倍液、ベンレート水和剤 3,000 倍液のいずれかを散布する。 モモハモグリガの重要な防除時期である。
10a 当り 散布量	450～500ℓ				

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病虫害〕	注 意 事 項																						
6 月 中 下 旬	<p>殺菌剤 チウラムフロアブル (チオノック、トレノックス) 200 ml</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <p>殺ダニ剤 <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>オマイト水和剤 (2回)</td> <td>133 g</td> </tr> <tr> <td>カネマイトフロアブル (1回)</td> <td>66 ml</td> </tr> <tr> <td>コロマイト乳剤 (1回)</td> <td>100 ml</td> </tr> <tr> <td>サンマイト水和剤 (1回)</td> <td>66 g</td> </tr> <tr> <td>ダニゲッターフロアブル (1回)</td> <td>50 ml</td> </tr> <tr> <td>ダニサラバフロアブル(2回)</td> <td>100 ml</td> </tr> <tr> <td>ダニトロンフロアブル (1回)</td> <td>50 ml</td> </tr> <tr> <td>バロックフロアブル (2回)</td> <td>50 ml</td> </tr> <tr> <td>ピラニカ水和剤 (1回)</td> <td>100 g</td> </tr> <tr> <td>マイトコーネフロアブル (1回)</td> <td>100 ml</td> </tr> </table> のいずれか () は登録の使用回数 (前年収穫後から収穫まで)</p> <table border="1" style="margin-top: 10px; width: 100%;"> <tr> <td style="width: 30%;">10a 当り 散布量</td> <td style="text-align: center;">450～500ℓ</td> </tr> </table>	オマイト水和剤 (2回)	133 g	カネマイトフロアブル (1回)	66 ml	コロマイト乳剤 (1回)	100 ml	サンマイト水和剤 (1回)	66 g	ダニゲッターフロアブル (1回)	50 ml	ダニサラバフロアブル(2回)	100 ml	ダニトロンフロアブル (1回)	50 ml	バロックフロアブル (2回)	50 ml	ピラニカ水和剤 (1回)	100 g	マイトコーネフロアブル (1回)	100 ml	10a 当り 散布量	450～500ℓ	<p>せん孔細菌病 黒星病 ホモプシス腐敗病 炭疽病 灰星病 疫病 モモノゴマダラノメイガ ハマキムシ類 ハダニ類 カイガラムシ類 シンクイムシ類 アブラムシ類 カメムシ類</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. ハマキムシ類の防除時期である。 2. ハダニ類は初期防除を心がける。 3. この時期からシンクイムシ類の発生が多くなる。モモシンクイガは6月下旬頃からの防除が必要である。 4. ツノアオカメムシが付近の雑木林(クヌギ、コナラ、ケヤキなど)に多い場合は、7月に入ると成虫がもも園に飛来し加害するので注意する。 5. この時期にモモハモグリガ幼虫の寄生が目立つ園では、7月上旬の防除を徹底する。 6. オマイトは樹勢の弱っている園及び干ばつ状態の園や、梅雨期及び曇天多雨の続いた後は、薬害のおそれがあるので使用しない。 7. オマイトはなしに薬害を生じる。 8. オマイトとダイアジノン混用しない。 9. カネマイトは、交配から交配30日後までのなしにかかるると薬に薬害を生じるので注意する。 10. ダニゲッターは他作物に薬害を生じるおそれがあるので注意する(総括注意9参照)。 11. コロマイト、バロックは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 12. サンマイト、ダニトロンは蚕毒と魚毒に、オマイト、コロマイト、ピラニカは魚毒に注意する。
オマイト水和剤 (2回)	133 g																								
カネマイトフロアブル (1回)	66 ml																								
コロマイト乳剤 (1回)	100 ml																								
サンマイト水和剤 (1回)	66 g																								
ダニゲッターフロアブル (1回)	50 ml																								
ダニサラバフロアブル(2回)	100 ml																								
ダニトロンフロアブル (1回)	50 ml																								
バロックフロアブル (2回)	50 ml																								
ピラニカ水和剤 (1回)	100 g																								
マイトコーネフロアブル (1回)	100 ml																								
10a 当り 散布量	450～500ℓ																								
<p>主要な早生種・中生種の収穫期をむかえるので、薬剤の使用時期(収穫前日数)に留意して防除する。</p>																									

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項		
7 月 上 旬	<p>殺菌剤 (ダコニール 1000 100 ml)</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <table border="1" data-bbox="379 616 770 712"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450~500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450~500ℓ	<p>灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 疫 病 せん孔細菌病 モモハモグリガ シンクイムシ類 モモノゴマダラノメイガ アブラムシ類 ハダニ類</p>	<ol style="list-style-type: none"> この回から灰星病、モモハモグリガ、シンクイムシ類などの重要な防除時期となるので、ていねいに散布する。 ダコニール及びその混合剤は除袋直後に散布すると果実に薬害を生じることがある。 ダコニールにスプラサイド水和剤又はスミチオン水和剤を混用すると薬害を生じるので混用しない。 早生種では収穫 20 日前頃からダコニールにかえて、別表-2 の灰星病防除薬剤を散布する。 モモハモグリガ成虫の発生が多い場合は、アドマイヤー水和剤、ジノテフラン顆粒水溶剤（アルバリン、スタークル）、ハチハチフロアブルの 2,000 倍液、ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤の 4,000 倍液、エクシレル S E、サムコルフロアブル 10 の 5,000 倍液、アドマイヤー顆粒水和剤 10,000 倍液、合成ピレスロイド剤、I GR 剤のいずれかを散布する。 合成ピレスロイド剤は蚕毒と魚毒に、I GR 剤、アドマイヤー、アルバリン、エクシレル、サムコル、スタークル、ダントツ、ハチハチ、フェニックス、モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
10a 当り 散布量	450~500ℓ				
7 月 中 旬	<p>殺菌剤 (ダコニール 1000 100 ml)</p> <p>殺虫剤 (別表-3による)</p> <table border="1" data-bbox="379 1747 770 1843"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450~500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450~500ℓ	<p>灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 せん孔細菌病 シンクイムシ類 ウメシロカイガラムシ クワコナカイガラムシ ハダニ類</p>	<ol style="list-style-type: none"> 灰星病の多発が予想される場合は、中生種にも別表-2 のいずれかの剤を散布する。 これ以降随時、灰星病、炭疽病の発病果は伝染源となるので、見つけ次第摘除し、土中に埋める。 ダコニールにスプラサイド水和剤又はスミチオン水和剤を混用すると薬害を生じるので混用しない。 ハダニ類の早期多発が予想される場合には、早目に殺ダニ剤を散布する。
10a 当り 散布量	450~500ℓ				

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項																						
7 月 下 旬	<p>灰星病防除薬剤 (別表-2による)</p> <p>殺 虫 剤 (別表-3による)</p> <p>殺ダニ剤</p> <table border="1" data-bbox="359 651 826 996"> <tr><td>オマイト水和剤 (2回)</td><td>133 g</td></tr> <tr><td>カネマイトフロアブル (1回)</td><td>66 ml</td></tr> <tr><td>コロマイト乳剤 (1回)</td><td>100 ml</td></tr> <tr><td>サンマイト水和剤 (1回)</td><td>66 g</td></tr> <tr><td>ダニゲッターフロアブル (1回)</td><td>50 ml</td></tr> <tr><td>ダニサラバフロアブル(2回)</td><td>100 ml</td></tr> <tr><td>ダニトロンフロアブル (1回)</td><td>50 ml</td></tr> <tr><td>バロックフロアブル (2回)</td><td>50 ml</td></tr> <tr><td>ピラニカ水和剤 (1回)</td><td>100 g</td></tr> <tr><td>マイトコーネフロアブル (1回)</td><td>100 ml</td></tr> </table> <p>のいずれか ()は登録の使用回数 (前年収穫後から収穫まで)</p> <table border="1" data-bbox="379 1167 770 1263"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	オマイト水和剤 (2回)	133 g	カネマイトフロアブル (1回)	66 ml	コロマイト乳剤 (1回)	100 ml	サンマイト水和剤 (1回)	66 g	ダニゲッターフロアブル (1回)	50 ml	ダニサラバフロアブル(2回)	100 ml	ダニトロンフロアブル (1回)	50 ml	バロックフロアブル (2回)	50 ml	ピラニカ水和剤 (1回)	100 g	マイトコーネフロアブル (1回)	100 ml	10a 当り 散布量	450～500ℓ	<p>灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 シンクイムシ類 ハダニ類 モモハモグリガ クワコナカイガラムシ ウメシロカイガラムシ ミカンキロアザミウマ ハマキムシ類 吸 蛾 類</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 晩生種ではベルコート水和剤、またはベルコートフロアブルの2,000倍液を散布する。 2. 炭疽病の発生がみられる場合は、フリントフロアブル25の2,000倍液を散布する。 3. ダコニールにスプラサイド水和剤又はスミチオン水和剤を混用すると薬害を生じるので混用しない。 4. ミカンキロアザミウマの発生園では、果実の着色期に防除する。 5. 果実の成熟につれて吸蛾類の被害が増加するので、夜間の捕殺に努める。電灯照明による防除法は総括注意7を参照する。 6. カメムシ類の発生園ではスミチオン水和剤40の1,000倍液をこの時期から散布する。 7. オマイトは樹勢の弱っている園及び干ばつ状態の園や、梅雨期及び曇天多雨の続いた後は、薬害のおそれがあるので使用しない。 8. オマイトはなしに薬害を生じる。 9. オマイトとダイアジノン混用しない。 10. ダニゲッターは他作物に薬害を生じるおそれがあるので注意する(総括注意9参照)。 11. コロマイト、バロックは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 12. サンマイト、ダニトロンは蚕毒と魚毒に、オマイト、コロマイト、ピラニカは魚毒に注意する。
オマイト水和剤 (2回)	133 g																								
カネマイトフロアブル (1回)	66 ml																								
コロマイト乳剤 (1回)	100 ml																								
サンマイト水和剤 (1回)	66 g																								
ダニゲッターフロアブル (1回)	50 ml																								
ダニサラバフロアブル(2回)	100 ml																								
ダニトロンフロアブル (1回)	50 ml																								
バロックフロアブル (2回)	50 ml																								
ピラニカ水和剤 (1回)	100 g																								
マイトコーネフロアブル (1回)	100 ml																								
10a 当り 散布量	450～500ℓ																								

時期	散布薬剤と葉量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項		
8 月 上 旬	灰星病防除薬剤 （別表－2による） 殺 虫 剤 （別表－3による） <table border="1" data-bbox="379 618 770 712"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450～500ℓ	灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 シンクイムシ類 ハマキムシ類 ミカンキロアザミウマ モモハモグリガ ハダニ類 クワコナカイガラムシ 吸 蛾 類	<ol style="list-style-type: none"> ハマキムシ類が多い場合は、果実に接している葉を早目に摘みとる。 ミカンキロアザミウマの発生園では、果実の着色期に防除する。 有袋栽培ではシンクイムシ類の食入やミカンキロアザミウマの吸汁を防ぐため、除袋後すみやかに防除する。
10a 当り 散布量	450～500ℓ				
8 月 中 旬	灰星病防除薬剤 （別表－2による） 殺 虫 剤 （別表－3による） <table border="1" data-bbox="379 1111 770 1205"> <tr> <td>10a 当り 散布量</td> <td>450～500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当り 散布量	450～500ℓ	灰 星 病 ホモプシス腐敗病 炭 疽 病 シンクイムシ類 モモハモグリガ モモノゴダラノメイガ ハダニ類 カメムシ類 吸 蛾 類	<ol style="list-style-type: none"> 晩生種では8月下旬にも別表－2の灰星病防除薬剤及び別表－3のシンクイムシ類の防除薬剤を散布する。 8月にモモハモグリガ成虫の発生が多い場合は、9月上旬にジノテフラン顆粒水溶剤（アルバリン、スタークル）2,000倍液、ダントツ水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤の4,000倍液、合成ピレスロイド剤、IGR剤のいずれかを散布する。収穫期が近い品種では、使用時期に注意する。 合成ピレスロイド剤は蚕毒と魚毒に、IGR剤、アルバリン、スタークル、ダントツ、モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
10a 当り 散布量	450～500ℓ				
【コスカシバ防除対策】 <ol style="list-style-type: none"> コスカシバ発生園では、幼虫の食入防止を狙って成虫発生盛期（8月中下旬～9月中旬ごろ）にフェニックスフロアブル4,000倍液を枝幹部にも十分量かかるよう丁寧に散布する。なお、この防除を実施しなかった場合、またはこの防除を実施しても虫糞排出が認められる場合は、必ず収穫後～休眠期の防除を実施する。 フェニックスは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。 					
農薬の使用回数の注意 使用回数は、収穫後から翌年の収穫までの期間の使用回数であるので注意する。					
【せん孔細菌病防除対策】 せん孔細菌病発生園では4－12式ボルドー液又はICボルドー412の30倍液を、9月中旬（収穫後）から2週間間隔で2～3回散布する。					

時期	散布薬剤と葉量（水 100ℓ当り） 及び、散布量	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病虫害〕	注 意 事 項		
9 月 中 ・ 下 旬 (収穫後)	殺 虫 剤 (スミチオン乳剤 100 ml) <table border="1" data-bbox="379 479 772 573"> <tr> <td data-bbox="379 479 539 573">10a 当たり 散布量</td> <td data-bbox="539 479 772 573">450～500ℓ</td> </tr> </table>	10a 当たり 散布量	450～500ℓ	せん孔細菌病 コスカシバ モモハモグリガ	
10a 当たり 散布量	450～500ℓ				
10 月 く 初 冬 期		縮 葉 病 コスカシバ	1. コスカシバの虫糞排出が認められる園では、収穫後(10月頃)にトラサイドA乳剤200倍液を樹幹及び主枝に散布する。 2. 縮葉病防除にオキシラン水和剤、キノンドー水和剤40の500倍液のいずれかを初冬期に散布する。この防除を行った場合、翌春の発芽直前の防除を省略できる。		

【別表－1】殺菌剤の適用病害に対する使用方法及び効果（灰星病防除薬剤は【別表－2】参照）

- ・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和4年11月30日現在）
- ・使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、薬剤に含まれる成分毎に総使用回数が別途決められているので、それを超えないように注意する。

薬剤の系統	薬剤名	FRACコード	使用基準 (収穫前日数)	使用回数(以内)	希釈倍数(倍)	対象病害に対する効果							注意事項該当番号
						縮葉病 (休眠期)	せん孔細菌病	黒星病	灰星病	ホモブシス 腐敗病	炭疽病	うどんこ病	
無機硫黄剤	石灰硫黄合剤	M2	発芽前	—	7	○*		○					5
	イオウフロアブル	M2	[※1]	—	500			○*					18
	サルファーゾル	M2	発病前～ 発病初期	—	500			○*					18
	コロナフロアブル	M2	—	—	500			○*				○*	18
有機硫黄剤	チオノックフロアブル トレノックスフロアブル	M3	7日	5	500	○*	○*	○	○				4, 19
	デランフロアブル	M9	7日	4	600	(1,000)	○*	○	○	○			6
有機銅及びその混合剤	キノドー水和剤40	M1	[60日]	5	500	○*							7, 19
	オキシラン水和剤	M1+M4	発芽前	4	500	○*							7, 19
無機銅剤	クプロシールド	M1	—	—	1,000		○*						8, 9, 10
	ボルドー液	M1	—	—	4-12式		○*						11, 19
	ICボルドー412	M1	—	—	30	○	○*						11, 19
抗生物質剤	アグリマイシン-100	41+25	60日	2	1,500		○*						1, 13
	アグレプト液剤 アグレプト水和剤	25	60日	2	1,000		○*						1, 13
	バリダシン液剤5	U18	7日	4	500		○*						15
	マイコシールド	41	21日	5	1,500		○*						12
SDHI剤	カナメフロアブル	7	前日	3	4,000			○	○*			○*	3, 19
	パレード15フロアブル	7	前日	2	2,000			○	○*			○*	3
ベンゾイミダゾール系剤	トップジンM水和剤	1	前日	6	1,000			○	◇*	○		○	2
	ベンレート水和剤	1	前日	3	3,000			○	◇*	○		○	2
QoI剤及びその混合剤	ストロビードライフロアブル	11	前日	3	2,000	○		○	○*			○*	3, 14
	フリントフロアブル25	11	前日	3	2,000			○	○	○	○*		3, 17, 19
	ナリアWDG	11+7	前日	2	2,000			○	○*	○	○	○*	3, 16, 19

【効果凡例】 ○*：効果ある（対象病害に普及済） ○：効果ある（対象病害に未普及）

◇：効果劣る（耐性菌の発生あり）（ ）：カッコ内の希釈倍数で対象病害に登録がある

【使用基準(収穫前日数)】 [] 書きは、生育ステージによる使用時期の制限があるので注意する。

※1：発病前～発病初期。ただし登録会社により使用時期が異なるので注意する。

【注意事項】（別表－1）

1. ストレプトマイシンを含む剤（FRACコード25 アグリマイシン-100、アグレプト液剤、アグレプト水和剤）は、せん孔細菌病に対して効果は高いが、すでにストレプトマイシン耐性菌が確認されているので注意する。
2. トップジンM、ベンレート（ベンゾイミダゾール系剤、FRACコード1）耐性の灰星病菌が蔓延しているため、これらの薬剤を灰星病防除には使用しない。
3. 薬剤耐性菌の出現防止のため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。特にSDHI剤（FRACコード7）、QoI剤（FRACコード11）（いずれも混合剤を含む）は年2回以内の使用にとどめる。
4. チオノック、トレノックスは有効成分、分量が同一である。
5. 石灰硫黄合剤は皮膚に刺激があるので注意する。
6. デランは人によってかぶれることがあるので注意する。

7. キノンドー、オキシランは展葉後に使用すると葉に甚だしい薬害を生じる。
8. クプロシールドは葉に薬害を生じることがあるので炭酸カルシウム水和剤を必ず加用する。また、6月以降は薬害を生じやすくなるので使用しない。弱樹勢樹では基部葉が赤変し、重度なものは落葉する場合があるため注意する。
9. クプロシールドは石灰硫黄合剤等アルカリ性薬剤との混用はさける。
10. クプロシールドはアグレプト、マイコシールドとの混用により凝集が生じる場合があるため注意する。
11. ボルドー液、ICボルドー412は開花始めと9月中旬～10月上旬以外の使用で薬害を生じるので使用時期を厳守する。
12. マイコシールド散布によりクロロシス（黄化現象）を生じることがある（作物の種類、環境などにより差があり、高温多湿時におきやすい）。
13. アグリマイシン-100、アグレプト液剤、アグレプト水和剤は満開約30日～14日前のぶどうにかかると種無し果の薬害を生じる。
14. ストロビーは開花始めから落花30日頃までのなし、開花期以降のおうとう、「巨峰」及び「デラウェア」以外のブドウ品種に薬害を生じるおそれがあるため注意する。
15. バリダシンはきく（「秀芳の力」等）にかかると薬害を生じるので、かからないようにする。
16. ナリアは開花始めから落花20日頃までのなし、西洋なし「ル・レクチェ」、ぶどう「ピオーネ」、「藤稔」、「サニールージュ」、「シャルドネ」に薬害を生じるおそれがあるため注意する。
17. フリントは6月上旬までの日本なし、袋掛け直前の西洋なし、おうとうの未展開葉、いちごにかかると薬害を生じることがある。
18. 水和硫黄剤（イオウ、コロナ、サルファー）は、気温が高くなるに従って薬害が生じやすくなるので、夏期高温時（28℃以上）の散布はさける。
19. カナメ、チオノック、トレノックスは蚕毒と魚毒が、オキシラン、キノンドー、ナリア、フリント、ボルドー（硫酸銅）は魚毒が強いので注意する。

【別表－２】 灰星病防除薬剤の使用方法及び効果

- ・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和４年１１月３０日現在）
- ・使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、薬剤に含まれる成分毎に総使用回数が別途決められているので、それを超えないように注意する。

薬剤の系統	薬剤名	FRACコード	使用基準 (収穫前日数)	使用回数 (以内)	希釈倍数 (倍)	対象病害に対する効果				注意事項該当番号
						灰星病	黒星病	ホモブシス腐敗病	炭疽病	
ジカルボキシイミド系及びその混合剤	スミレックス水和剤	2	3日	3	1,500	○*				7
	ロブラール水和剤	2	前日	3	1,500	○*				
	ロブラール 500 アクア	2	前日	3	1,500	○*				
	ダコレックス水和剤	2+M5	3日	3	800	○*		○		2, 13
DMI 剤	アンビルフロアブル	3	前日	3	1,000	○*	○			1
	インダーフロアブル	3	前日	4	5,000	○*	○			1
	オーシャイン水和剤	3	前日	3	2,000	○*	○	○		1, 9
	オンリーワンフロアブル	3	前日	3	2,000	○*	○	○	○	1, 10
	サンリット水和剤	3	前日	3	2,000	○*				1
	スコア顆粒水和剤	3	前日	3	2,000	○*	○			1, 3, 11
	トリフミン水和剤	3	前日	3	1,000	○*	○			1
	ラリー水和剤	3	前日	4	2,000	○*				1
SDHI 剤	カナメフロアブル	7	前日	3	4,000	○*	○			1, 13
	パレード 15 フロアブル	7	前日	2	2,000	○*	○			1
	フルーツセイバー	7	前日	3	2,000	○*	○			1
TPN 単剤 及びその混合剤	ダコニール 1000	M5	前日	6	1,000	○*	○			4, 5, 13
	ダコレート水和剤	M5+1	3日	3	1,000	○*	○	○*		4, 13
QoI 剤 及びその混合剤	ストロビードライフロアブル	11	前日	3	2,000	○*	○			1, 8
	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	前日	3	3,000	○*	○	○		1
	ナリアWDG	11+7	前日	2	2,000	○*	○	○	○	1, 12, 13
その他	ベルコート水和剤	M7	前日	3	2,000	○*	○	○*		6
	ベルコートフロアブル	M7	前日	3	2,000	○*	○	○		6
	ダイヤモンド	M7+17	前日	2	1,500	○*	○	○*		6

【効果凡例】 ○*：効果ある（対象病害に普及済） ○：効果ある（対象病害に未普及）

【注意事項】（別表－２）

1. 薬剤耐性灰星病菌の出現防止のため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。特にDMI 剤（FRACコード3）、SDHI 剤（FRACコード7）、QoI 剤（FRACコード11）（いずれも混合剤を含む）は年2回以内の使用にとどめる。
2. ダコレックスはスミチオン又はパーマチオンと混用すると薬害を生じるので、混用しない。
3. スコアとピラニカは混用しない。
4. ダコニール及びダコレートは除袋直後に散布すると果実に日焼け状の薬害を生じることがある。
5. ダコニールにスプラサイド又はスミチオンを混用すると薬害を生じるので、混用しない。
6. ベルコート、ダイヤモンドは缶詰用品種に薬害を生じる。また、芽出し2週間後から落花25日後ころまでのりんご及び、西洋なし「ル・レクチェ」、かき「西村早生」、メロン、ばらなどに薬害を生じることがある。

7. スミレックスはぶどうの伸長中の若葉に薬害を生じるので、かからないようにする。
8. ストロビーは開花始めから落花 30 日頃までのなし、開花期以降のおうとう、「巨峰」及び「デラウェア」以外のブドウ品種に薬害を生じるおそれがあるため注意する。
9. オーシャインはウリ科（きゅうり、メロンなど）に薬害を生じることがある。
10. オンリーワンは、はくさい、だいこんに薬害を生じることがある。
11. スコアは西洋なし「ル・レクチェ」果実に薬斑を生じることがある。
12. ナリアは開花始めから落花 20 日頃までのなし、西洋なし「ル・レクチェ」、ぶどう「ピオーネ」、「藤稔」、「サニールージュ」、「シャルドネ」に薬害を生じるおそれがあるため注意する。
13. カナメは蚕毒と魚毒が、ダコニール、ダコレート、ダコレックス、ナリアは魚毒が強いので注意する。

薬剤の系統	殺虫剤名	I R A Cコード	(収穫前日数)使用基準	使用回数(以内)	希釈倍数(倍)	対象害虫に対する効果								注意事項該当番号
						シンクイムシ類	ハマキムシ類	モモハモグリガ	アブラムシ類	カイガラムシ類	ウメシロカイガラムシ	カメムシ類	コスカシバ	
ネオニコチノイド剤	アドマイヤー水和剤	4	3日 (注1)	2	2,000			○*	○*					3,5
	アドマイヤー顆粒水和剤	4	3日 (注1)	2	10,000			○*	○*			○		3,5
	アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	4	前日	3	2,000	○		○*	○*			○		3,5 ,9
	ダントツ水溶剤	4	7日	3	4,000	○		○*	○*			○		3,5
	バリアード顆粒水和剤	4	前日	3	4,000	○		○	○*					5
	ベストガード水溶剤	4	14日	3	1,000				○*					
	モスピラン顆粒水溶剤	4	前日	3	4,000	○*		○*	○*			○	○ (注2)	3,5 ,8
ジアミド剤	エクシレルSE	28	前日	3	5,000	○	○	○*						3,5,7
	サムコロフロアブル10	28	前日	2	5,000	○	○	○*				○		3,5, 7,13
	フェニックス顆粒水和剤	28	前日	2	4,000	○	○	○*						3,5, 7,13
	フェニックスフロアブル	28	前日	2	4,000	○	○	○				○*		5,7, 13
その他	ウララDF	29	14日	2	4,000				○*					13
	コテツフロアブル	13	前日	2	2,000			○			○		○*	6
	コルト顆粒水和剤	9	前日	3	4,000				○*					7
	スピノエースフロアブル	5	3日	3	6,000			○					○*	5
	ディアナWDG デリゲートWDG	5	前日	2	10,000	○	○	○					○* (注2)	5,10
	ハチハチフロアブル	21	前日	2	2,000	○		○*	○*					3,5 ,6

【使用基準】 (注1) : 但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く

【効果凡例】 ○* : 効果ある(対象害虫に普及済) ○ : 効果ある(対象害虫に未普及) △ : 効果劣る

(注2) : 適用害虫はアザミウマ類

() : カッコ内の希釈倍数で対象害虫に登録がある

【注意事項】 (別表-3)

1. スミチオンは5月に散布すると薬害が生じることがある。
2. スプラサイドは6月下旬までの散布で葉に穴あき状の薬害が生じることがある。
3. モモハモグリガに対して、食入防止効果が高い薬剤である。
4. 合成ピレスロイド剤は人によって、くしゃみやかぶれが出ることがあるので注意する。
5. 合成ピレスロイド剤は蚕毒と魚毒が、I GR剤(アブロードを除く)は蚕毒が極めて強く、使用地域の指定があるのでこれ以外では使用しない。ネオニコチノイド剤(ベストガードを除く)、エクシレル、サムコル、スピノエース、ディアナ、デリゲート、ハチハチ、フェニックスは蚕毒が特に強いので桑園付近では使用しない(特別指導事項参照)。
6. ダーズバン、コテツは蚕毒と魚毒が、サイアノックス、スプラサイド、スミチオン、ダイアジノン は蚕毒が、ハチハチは魚毒が強いので注意する。
7. エクシレル、コルト、サムコル、フェニックスは水産動物(特に甲殻類)に影響が強いため注意する。

8. モスピランは施設栽培で葉に薬害を生じることがある。
9. アルバリンとスタークルは有効成分、分量が同一である。
10. ディアナとデリゲートは有効成分、分量が同一である。
11. スプラサイド、スミチオンは、ダコニールと混用すると薬害を生じるので混用しない。
12. スミチオン、パーマチオンは、ダコレックスと混用すると薬害を生じるので混用しない。
13. 訪花昆虫に対し、IGR剤、ウララ、サムコル、フェニックスは影響が少ない。訪花昆虫が活動中は、これら以外の薬剤を使用しない。

【別表－４】 交信かく乱剤の設置時期・量

交信かく乱剤は殺虫効果がなく、交尾を阻害し次世代の増殖を抑制するものである。交信かく乱剤のみで対象害虫を防除することは不可能であるため、必ず殺虫剤による補完防除を行う。なお、複数の対象害虫に対して使用する場合、殺虫剤の散布回数削減が可能である。

交信かく乱剤の種類と設置方法

使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和4年11月30日現在）

薬 剤 名	適用害虫名	設置時期・量	設置方法
コンフューザーMM	モモシクイガ ナシヒメシクイ リンゴコカクモンハマキ モモハモグリガ	落花期から5月中下旬 まで（120本/10a）	目どおりの高さに設置する。
スカシバコンL	コスカシバ	4月下旬 （50本/10a）	目どおりの高さの枝に巻きつける。

注）フェロモントラップを設置し、交信かく乱の状況を把握することが望ましい。
ナシヒメシクイの発生園では、コンフューザーMMを早めに設置する。

〔コンフューザーMM設置園におけるモモハモグリガの発生予察法〕

コンフューザーMM設置園では、従来のフェロモントラップによりモモハモグリガ成虫の発生時期を把握できないが、以下の方法により把握し防除適期を判断することができる。

- 1 トラップは、一般的に用いられる2方向開口型の屋根と粘着板を用いる。
- 2 誘引源として、コンフューザーMM5本を束ねずに、間隔をあけて屋根の内側に取り付ける。
- 3 誘引源のコンフューザーMMは、調査が必要な5月中旬～9月中旬までの4ヵ月間、交換することなく使用できる。
- 4 成虫発生始期から盛期の間に、食入防止効果の高い殺虫剤を散布する。

【総括注意】

1. 品種の混植園等では、薬剤の使用時期（収穫前日数）に留意して薬剤を選定し、薬液の飛散に注意して防除にあたる。
2. 胴枯病は、凍害などで誘発される。発病予防のため、冬期間主幹部にワラなどを巻いたり、枝の配置を考慮して夏季の日よけを作る。
3. 果実に感染するうどんこ病の病原菌は、白色病斑を生じる*Podosphaera pannosa* と、褐色病斑（毛じ障害）を生じる*P. leucotricha* の2種類がある。*P. leucotricha* はリンゴうどんこ病の病原菌でもあるため、近隣のりんご園でうどんこ病の発生が多い場合に多発しやすいので注意する。
4. 褐色病斑を生じるうどんこ病（毛じ障害）の発病には品種間差異があり、「あかつき」、「なつつこ」で特に発生が多く、「あぶくま」、「なつき」でも発病する。「白鳳」、「川中島白桃」、「紅晩夏」、「だて白桃」、「白根白桃」での発病は少ない。
5. 灰星病発病果は見つけ次第、除去して土中に埋める。また冬季剪定時に枯れ枝やミイラ果の付着している枝は切除して焼却する。
6. コウモリガは6月以降に食入が多くなる。早期発見に努め、被害を認めた時は虫孔に針金を差し込み刺殺する。また、株元、園周辺の雑草は常に刈り取っておく。
7. 吸蛾類防除に黄色蛍光灯の夜間照明が有効である。被害防止が期待できる照度は果実面で1ルックスとされている。設置方法、設置数は各器材の使用法に従う。
8. 殺ダニ剤の使用法については、りんごの項【別表－３】（殺ダニ剤の使用法）を参照。
9. **ダニゲッター**は、以下の薬害のおそれがあるので、周辺作物へ飛散しないよう十分注意する。
 - (1) なし、おうとうにも適用登録があるが、時期（主に新梢伸長期）、品種、有機リン剤との同時散布や近接散布で、新梢（伸長中の新梢先端部）に薬害を生じるおそれがある。
 - (2) 開花期の**水稲**にかかった場合、不稔などを生じるおそれがある。
 - (3) ぶどう（新芽新葉）、キャベツ、はくさい、こまつな、ねぎ、みょうが、ばら、シンビジウム等のラン類に対して薬害を生じるおそれがある。